

## ヨハネの福音書 (56)

### 「十字架刑」

ヨハ 19 : 17～30

#### 1. 文脈の確認

##### (4) イエスの受難 (18～20 章)

- ①イエスの逮捕 (18 : 1～11)
- ②イエスの宗教裁判 (18 : 12～27)
- ③イエスの政治裁判 (18 : 28～40)
- ④有罪判決 (19 : 1～16)
- ⑤十字架刑 (19 : 17～30)

#### 2. 注目すべき点

- (1) 王としてのイエスの姿が描かれる。
- (2) 大祭司としてのイエスの姿が描かれる。
- (3) 贖い主としてのイエスの姿が描かれる。

イエスは3つの役割を果たされた。

イエスは王であり、大祭司であり、贖い主である。

#### I. 王としてのイエスの姿 (17～22 節)

##### 1. 17 節

Joh 19:17 イエスは自分で十字架を負って、「どくろの場所」と呼ばれるところに出て行かれた。そこは、ヘブル語ではゴルゴタと呼ばれている。

- (1) イエスは自分で十字架を負った。
  - ①共観福音書では、クレネ人シモンが途中から十字架を担がされた。
  - ②ヨハネの強調点は、イエスが主体的に贖いの道を歩まれたことにある。
  - ③十字架の死は、自ら進んで選ばれたものである。
- (2) 「どくろの場所」と呼ばれるところに出て行った。
  - ①ヘブル語でゴルゴタ、ラテン語でカルバリ
  - ②ユダヤの伝承では、アダムの頭蓋骨が埋葬された場所だとされる。
  - ③ゴルゴタでの死は、旧約のいけにえ制度の型の完成である。
  - ④「宿営の外で焼かれる」贖罪のいけにえ (レビ 16 : 27) の成就。

##### 2. 18 節

**Joh 19:18** 彼らはその場所でイエスを十字架につけた。また、イエスを真ん中にして、こちら側とあちら側に、ほかの二人の者を一緒に十字架につけた。

(1) イエスを真ん中にした。

①「罪人とともに数えられた」(イザ 53 : 2)

②人類を二分する象徴

\* イエスをどう受け入れるかが唯一の分岐点になる。

③人間的には辱めの象徴、霊的には「王として中央に座する」姿。

\* これはヨハネの神学(十字架=栄光の顕現)に即している。

④ヨハネの福音書全体でイエスは「中心に立つお方」(7 : 37、8 : 2、20 : 19)。

⑤イエスは贖いの歴史の中心に立ち、全人類の行く末を決定する中心人物。

### 3. 19～20 節

**Joh 19:19** ピラトは罪状書きも書いて、十字架の上に掲げた。それには「ユダヤ人の王、ナザレ人イエス」と書かれていた。

**Joh 19:20** イエスが十字架につけられた場所は都に近かったので、多くのユダヤ人がこの罪状書きを読んだ。それはヘブル語、ラテン語、ギリシア語で書かれていた。

(1) 罪状書き

①罪状を記した札が犯人の首に掛けられた。

②後に十字架の上に掲げられた。

(2) 「ユダヤ人の王、ナザレ人イエス」と書かれていた。

①「自称ユダヤ人の王ナザレのイエス」を皮肉に強調した表現

②神の視点からは、これは真理の宣言である。

③人間の意図を越えて、神の計画が成就している例である。

(3) 3 言語で書かれたことの意味

①ヘブル語：ユダヤ人の宗教的言語。

②ラテン語：ローマ帝国の公用語、政治と権力の象徴。

③ギリシア語：国際共通語、文化と哲学の象徴。

(4) イエスが全世界の王であることの象徴。

①すべての民族・文化・言語に対する普遍的支配を示す(黙 7 : 9)。

②「多くのユダヤ人が読んだ」(20 節)。群衆への公的証言。

③十字架は敗北の場ではなく、真の王が即位する場である。

④ヨハネ独特の「逆説的栄光の神学」。

#### 4. 21～22 節

**Joh 19:21** そこで、ユダヤ人の祭司長たちはピラトに、「ユダヤ人の王と書かないで、この者はユダヤ人の王と自称したと書いてください」と言った。

**Joh 19:22** ピラトは答えた。「私が書いたものは、書いたままにしておけ。」

##### (1) ユダヤ人の指導者たちの抗議

①群衆に誤解を与えないために「自称した」と書くように求めた。

##### (2) ピラトの回答

①「私が書いたものは、私が書いたのだ」

②皮肉と反抗のことば。ユダヤ人に対する最後の抵抗。

③「イエスがユダヤ人の王である」ことを確定する宣言となった。

④黙 19 章では「王の王、主の主」として再臨される。先取りの宣言。

## II. 大祭司としてのイエス (23～27 節)

### 1. 23 節

**Joh 19:23** さて、兵士たちはイエスを十字架につけると、その衣を取って四つに分け、各自に一つずつ渡るようにした。また下着も取ったが、それは上から全部一つに織った、縫い目のないものであった。

##### (1) ローマ兵の行為

①処刑にあたった兵士たちは、受刑者の衣服を分け合う慣習があった。

②イエスの衣服は 5 点あったと考えられる。

＊外套、ベルト、サンダル、ターバン（または頭巾）、下着

③兵士は 4 人（小隊の一班）。4 点を分け、残る「下着」が問題となった。

##### (2) 縫い目のない下着

①ヨハネは特に「縫い目のない一枚織りの下着」であったことを強調する。

②現代の下着（肌着）とは違い、長袖または半袖のワンピース型の衣服。

③材質は麻布や羊毛で、縫い目のない「無縫製のチュニック」も存在。

④出エジ 28 : 31～32 : 大祭司の服は「一枚織り」で作られた。

⑤イエスの衣服は「真の大祭司」としての象徴と解釈できる。

##### (3) 神学的意味

①人間の目には「敗北した罪人」と映るが、その衣服は大祭司であることを示す。

②イエスは十字架上で「大祭司」としての働きを成就している。

③いけにえの動物ではなく、ご自身を献げている。

## 2. 24 節

**Joh 19:24** そのため、彼らは互いに言った。「これは裂かないで、だれの物になるか、くじを引こう。」これは、／「彼らは私の衣服を分け合い、／私の衣をくじ引きにします」／とある聖書が成就するためであった。それで、兵士たちはそのように行った。

### (1) 兵士たちの行為

- ①下着（キトン）は裂くと価値が下がるため、くじを引いて所有者を決めた。
- ②人間的には単なる習慣・偶然の行為、神の視点では預言の成就。

### (2) 詩 22 : 18 の成就

**Psa 22:18** 彼らは私の衣服を分け合い／私の衣をくじ引きにします。

- ①ダビデの詩の中に描かれた受難の姿が、逐語的に実現した。
- ②兵士の無意識の行為さえ、神の主権のもとで預言成就の一部となる。

### (3) 大祭司としての完成（ヘブ 4 : 16）

- ①衣を裂かれずに残したことは、大祭司の衣の完全性を保つ象徴でもある。
- ②大祭司は衣を裂いてはならない（レビ 21 : 10）。

## 3. 25 節

**Joh 19:25** イエスの十字架のそばには、イエスの母とその姉妹、そしてクロパの妻マリアとマグダラのマリアが立っていた。

### (1) 女性の信仰の忠実さ

- ①他の弟子たちが逃げる中、女性たちは信仰と愛のゆえに最後まで残った。
- ②神は「弱いと思われる者」を用いて、最も重要な証人とされた。

### (2) マリアの立場

- ①母マリアの苦しみは特別である。
- ②彼女は「救い主の母」であって「救い主」ではない。
- ③ヨハネは、マリアを「苦しむ一人の信仰者」として描いている。

### (3) 十字架のそばにいる人々は、後に教会を形作る信仰共同体の雛形。

- ①ユダヤ人女性たちが中心にいる。教会がユダヤ的背景を持つことを示唆。

## 4. 26~27 節

Joh 19:26 イエスは、母とそばに立っている愛する弟子を見て、母に「女の方、ご覧なさい。あなたの息子です」と言われた。

Joh 19:27 それから、その弟子に「ご覧なさい。あなたの母です」と言われた。その時から、この弟子は彼女を自分のところに引き取った。

(1) 新しい共同体形成

- ①母を弟子ヨハネに託すことで、信仰による新しい家族共同体を指し示した。
- ②これは教会時代における「神の家族」の先取り。
- ③イエスとマリアの母子関係は断ち切れ、主従関係が始まった。

(2) マリアの位置づけ

- ①マリアは「救い主の母」ではあるが、救いにおいてはあくまで「一信仰者」。
- ②イエスが「女の方」と呼んだのは、マリア崇拝を否定する聖書的根拠である。

(3) なぜ弟子ヨハネに委ねられたのか。

- ①この時点でイエスの肉の兄弟たちは不信仰だった。
- ②ゆえに「信仰に基づく関係」が優先された。

### III. 贖い主としてのイエス (28～30 節)

#### 1. 28～29 節

Joh 19:28 それから、イエスはすべてのことが完了したのを知ると、聖書が成就するために、「わたしは渇く」と言われた。

Joh 19:29 酸いぶどう酒がいっぱい入った器がそこに置いてあったので、兵士たちは、酸いぶどう酒を含んだ海綿をヒソプの枝に付けて、イエスの口もとに差し出した。

(1) 「わたしは渇く」は詩篇 69:21 の直接的成就。

- ①イエスのことばは単なる苦痛の叫びではなく、預言成就の宣言。

(2) 肉体と霊の両面の渇き

- ①イエスは真の人間として肉体的渇きを経験された。
- ②同時に、神からの断絶の中で霊的な渇きを経験された。
- ③これによって、私たちが「永遠に渇かない」救いを得る (4 章、7 章)。

(3) 贖いの完成への布石

- ①このことばは「完了した」(19 : 30) の直前に置かれている。
- ②イエスは預言成就を最後まで意識し、計画的に贖いを完成させた。

## 2. 30 節

Joh 19:30 イエスは酸いぶどう酒を受けると、「完了した」と言われた。そして、頭を垂れて霊をお渡しになった。

### (1) 「テテレスタイ」の法的意味

- ①「完全に支払い済み」という法的・商取引的用語。
- ②人類の罪の借金が完全に支払われ、追加の償いは不要となった。

### (2) 旧約制度の終結と完成

- ①動物の犠牲・律法・祭司制度はすべてここで完成。
- ②イエスは「大祭司」として、ご自身を唯一無二のいけにえとして献げた。

### (3) 主体的死

- ①「霊を渡された」は、イエスが自発的に死を選び取られたことを示す。
- ②十字架の死は強制ではなく、愛による自由意志のささげ物。

## 結論：今日の信者への適用

### 1. 十字架が人類を二分する事実を受け止める。

- (1) 十字架は今も、人を「信じる者」と「拒む者」に分けている。
- (2) この分岐点の現実を覚え、十字架を伝える使命を担う必要がある。

### 2. 王なるイエスを告白する。

- (1) 「ユダヤ人の王ナザレのイエス」との札は 3 言語で掲げられた。
- (2) ここには終末の出来事の実現がある。
- (3) イエスを王と告白するとは、日常生活のすべての領域に主権を認めること。

### 3. 教会は新しい家族であることを認識する。

- (1) イエスは母と愛する弟子を新しい家族として結びつけた。
- (2) 血縁よりも深い「霊的家族」として教会を理解すべきである。
- (3) 互いに重荷を担い合うべきである (ガラ 6:2)。
- (4) かしらであるキリストに近づくほどに、霊的家族の実体が完成する。

### 4. 贖いの完成に立って生きる。

- (1) 「完了した」は罪の支払いが完全に終わったという宣言。
- (2) 救いの不確かさや「わざによる贖い」に縛られる必要がない。
- (3) 完成した救いに立ち、安心と確信の中で生きるべきである。